

地域再編におけるアートと歴史

——横浜市中区黄金町における実践者の語りから——

坂井晃介

I. はじめに

神奈川県横浜市中区黄金町では2008年以降、大規模なアートイベントによる地域再編が行われてきた。この実践は、今日まで継続的な注目を集めている。

この黄金町の地域再編については、一方で性風俗営業の一掃で生じた街の空洞化問題を地域アートによって解決した事例として肯定的に評価する研究(井上・友成[2014]ほか)が、他方でこれにより、過去の黄金町を想起させる人々や表象が排除されており(齊藤[2013]、越智[2016])、街の高級化(ジェントリフィケーション)が起きているとみなす立場(檀原[2014: Loc1517-1528]ほか)がある。

しかし、黄金町の地域再編に実際に取り組んできた人々は、一連の試みを当地の過去の記憶や現状との関係からいかに評価しているのだろうか。本稿はこうした問題意識から行われた黄金町での調査結果を報告するものである。

II. 黄金町の歴史と「アートによるまちづくり」

黄金町⁽¹⁾は、第二次世界大戦後に大規模な闇市が形成された地域である。それにより男性日雇い労働者向けの簡易宿泊所が当地に増加し、彼らを対象とした麻薬の売買や違法特殊飲食店での売買春行為が横行するようになっていった。特に売買春行為は、高度経済成長期を経て、京急高架下に集中する形で綿々と続いた。

地域再編の直接の契機は、2000年代初頭に実

施された京急電鉄による高架の耐震補強工事である。これに伴い、高架下の約100軒の違法特殊飲食店は立ち退きを求められたが、隣接する地域に移転・拡散し、それに乗じた店舗も合わせ、約250店舗にまで増加してしまう。不満を抱いた住民は町外へ転出し、その空き家を風俗関係者が押さえ、新たな小規模店舗にするという悪循環が続いた(鈴木[2009: 62])。

これを危惧した地域住民は、2003年に日ノ出町と初音町の町内会を中心に「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」(以下「協議会」と表記)を組織し、行政や警察に地域の状況改善を訴える仕組みを形成した。これは神奈川県警による一斉摘発(通称「バイバイ作戦」)につながり、2005年には違法特殊飲食店がほぼ一掃された。

売春業を徹底的に排除した結果、黄金町は「普通の町」に近づいたものの、それと引き換えに街は空洞化し、かつての賑わいを失った。

黄金町のアートによるまちづくりは、こうした街の空洞化という問題に直面するなかで、2006年のアーティスト・イン・レジデンス⁽²⁾に始まる。さらに2008年には、借り上げ店舗や高架下スタジオ、空き地など、エリア全体を会場としたアートフェスティバル「黄金町バザール」が開催される。黄金町バザールは「アートによるまちづくり」の方向性を明確に打ち出し、黄金町がアートの街として新たに注目を集める契機となった(鈴木[2009: 64]、井上・友成[2014: 206])。この取り組みは、2009年にNPO法人黄金町エリアマネジメントセンター(以下「エリ

アマネジメントセンター」と表記)が設立されることで、より継続的な試みとして実現する(山野[2010: 45])。

III. 調査概要と結果

本調査では、2017年12月から2018年1月にかけて、地元商店主、町内会メンバーとして長らく地域再編の中心的役割を担ったA氏(70代男性)、アートイベントのディレクションのために招聘され、黄金町エリアアマネジメントセンターの運営に携わっているB氏(60代男性)、過去に黄金町アーティスト・イン・レジデンス事業に参加し、現在も黄金町でアート活動を行っているC氏(30代男性)に、半構造的インタビューを実施した。

インタビューでは、三者の経歴や黄金町との関わりに加え、地域再編に対する地域住民の反応、当地人自身のアートや黄金町の歴史についての意味づけ、この地域再編のジェントフィケーション性などについて質問を行った。以下ではA氏、B氏、C氏の順に、その結果を略述していく。論点となるのは、地域再編におけるアートと歴史をめぐる意味づけの複数性である。

III.1. 手段としての「アート」：A氏の語り

A氏は地元商店主として長らくこの地域に関わってきた。

2002年の京急電鉄による高架耐震補強工事によって経験された黄金町の変化のうち、特にA氏が問題視したのは、戦後からある違法特殊飲食店と地域との関わり方の変化である。

それまでの違法特殊飲食店は、地域で飲食店の納税に関する組合をつくり、「地域の義務としてのことは積極的にやってくれた」という。しかしこうしたつながりは、違法特殊飲食店の担い手が変わったことで途絶えてしまう。100軒以上の小規模店舗立ち退きにより、「早く言えば暴力団の管理下」にあるような店舗が組織

的に入るようになり、地域的なつながりを絶って商売を行うようになったという。

A氏はこれが、多方面での「環境の悪化」を招いたとみなす。しかもこの「環境の悪化」とは「コミュニケーションがとれなくなって、物事が伝わらなくなった」というより「根本的なもの」である。すなわち売春の担い手は、以前は町内に根をおろし昔から住んでいた人々が中心であったが、その後外国人がメインとなり、言語的な困難から町内の様々な事項についてやりとりすることができなくなっていった。その結果、相互の取り決めなども進まず、若い女性が表に立って客引きを行うようになり、活動も派手になった。それを追うようにして、買春する客が押し寄せてくるようになってしまったという。

他方、こうした問題意識から展開された協議会による実践は一定程度成功をみせた。そして、これにより賑わいを失った街にあらたな風を吹かせることが「アートによるまちづくり」の狙いである。しかしA氏をはじめとする町内の人々にとって、こうした取り組みは当初、以下のように懐疑的なものであった。そもそもA氏をはじめとする地域の人々にとって、「まちづくりを商売以外の何かに置き換えてできるという印象はなかった」のだという。

特にその懐疑は、現代アートの理解できなさからきている。A氏自身もアートに普段から触れてきたが、抽象的な現代アートは、その意図を理解するのが難しかったと語る。

そのためA氏をはじめとする地域の人々にとって重要であったのは、アート作品そのものではなく、これらが、空洞化しつつある地域を活性化させるような役割を担う機能を実際に有しているかということであった。

その点でA氏は、一連のアートプロジェクトにより、アーティストが当地に訪れ滞在することで、住民との新しいコミュニケーションが生

まれていることを評価する。

例えばバザールの際、アーティストは制作のために特定の材料や情報、さらに海外のアーティストの場合通訳を必要とする。そうした際、エリアマネジメントセンターを介してアーティストと地域の人々は具体的なレベルで関係を持ち、交流がなされるようになる。

…作品自体にはあまり興味がわかりませんね。むしろ作品を作る材料を手に入れたいときに、「知らない？」って頼ってくれて、「あの人に聞けばわかるんじゃないかな」ってアドバイスしたりする。そういう人とのつながりは、単純にアートではなくて、人の連携でつながっていく。

こうした評価は、一連のアートプロジェクトが、A氏にとってはあくまで地域再編のための手段や道具であることを如実に示すものである。

こうした見方は黄金町の歴史に対するA氏の考えからもうかがえる。A氏は戦後以来の黄金町の様々な「負の歴史」を今後の黄金町に一切結びつけようとしなない。むしろ2000年以後の黄金町のネガティブなイメージを払拭するため、数百年単位の「歴史」、すなわち神社や歴史的建造物を重要視し、これを次世代の子どもたちに語り継ぐことを目指す。

ですから… [地域の] 子どもたちが、ここに15年くらい前まではそういうの [違法風俗店] があっていうことで、世間から引け目に感じちゃかわいそうだなって思って。子どもたちをこの界隈や横浜の歴史あるところへ地域の人が連れて行って説明して「ここはこういうとこだった」って説明して。自分たちの街を知って一番大事なことじゃないですか。子ども達にとって地域に誇りを持つてることが大事。

こうした試みにより、数十年の過去の記憶を払拭し、地域のさらなる発展の材料を見つけ出すことが目指されている。これはアートとは異なる道筋でのまちづくり戦略であるといえる。

III.2. 「公式見解」のジレンマ：B氏の語り

B氏の黄金町との関わりは、2007年秋に地域再編を企図していた横浜市が、B氏へ黄金町バザール開催の協力を要請したことにはじまる。現在、2009年設立のエリアマネジメントセンターの運営にかかわっている。

このエリアマネジメントセンターは、その名の通りまちづくりに関しても中心的な役割を担っている。アートイベントそのものよりも、それによって目指される継続的なまちづくりに地域住民の関心が向いていたため、このような役割を担うに至ったのだという。

しかし「地域住民」も一枚岩ではない。B氏は主に、売春をなくし「普通の」街にしようとする地域住民と仕事をしてきたが、反対する地域住民とも対峙してきたという。

活動を進め、「お互いに顔の見える関係になっていく」ことで「積極的な人たちとも反対の人ともお付き合いをする」「つなぎ役」としての役割が重要になってきたという。その中には昔から売春業に従事していた人や、2005年の一斉摘発以後、昔の売春店舗を再利用しようとして進出してきた勢力もいた。前者との話し合いでは、相手方から「怒鳴られっぱなしだった」という。

そうした苦労を経て実現していったアートによるまちづくりだが、B氏にとってそこにおける「アート」とはそもそもいかなるものなのか。長く美術展のキュレーションに携わってきたB氏にとって、それはA氏のように単なるまちづくりの手段にとどまるものではない。

この仕事をはじめたときから、アート概念の自己同一性というの維持できるのか。…街の中に作品を置いてみてどうなるかなとやってみたら、ほとんどダメでした。モノの中にアイデンティティはないという。関係のなかにしかない。

B氏にとり、アートのアイデンティティは「関係の中にしかない」ものであり、同時にその関係性の構築によって、「現実の空間の中にフィクションを持ち込んで」、両者を変容させようとする実践である。黄金町における一連のアートプロジェクトも、これが念頭に置かれている。

しかし、B氏の役割はあくまでもまちづくりのためのアートディレクションであり、自由にアーティストを呼び新しい関係の創出と変容を企図することではない。

地域の人々にとって「アート」は理解できない、異質なものとして現れていた。そのためB氏がアートディレクションを行っていく際にも、当初はなるべくハードルを低く設定し、段々と「単純にわかりやすくアートといえないもの」を混ぜていくなど芸術性を少しずつ高め、地域に溶け込めるよう工夫していった。

作品レベルでいえば、特に初期のころは「負の歴史」の一部であるとA氏ら地域住民が考える「性的な表現や売春を想起させるものはやめてねというの強かった」という。そのため、個々の作品の展示可否は、最終的に協議会や住民の声を聞きながら行われた。

しかしもちろん、こうした作品を完全にシャットアウトし続けているわけではない。芸術性を高めていくのと同様、娼婦や日雇い労働者などまちづくりの意図に合わないとなみなされかねないテーマの作品も次第に認め、作品群全体を

多様にしていくことが目指されているという。これをB氏は「ハードルを少しずつあげる」と表現しているが、黄金町の「負の歴史」を直接間接に参照する作品を、地域の再生の手がかりとして少しずつ取り入れていっている。

他方、黄金町における実践がアートによるジェントリケーションを助長しているという批判についてはB氏は独自の見解を持っている。

アートで何とかというと、くさいものに蓋をしているようにいわれるが、アートではなかなか蓋のしようがない。アーティストってそんなに馬鹿じゃないので。蓋する役割なんかお断り、ごめんこうむりますというでしょう。

黄金町の「アートによるまちづくり」は行政や地域住民による地域像と強く結びついているが、アーティストおよびアート作品の自律性および攪乱は制御できないというのである。

また街の高級化や地価の高騰といった現象も、アート事業を始めた直後を除き、ほとんど見られないという。むしろB氏は、最近次第に売春に転用可能なワンルームマンションが建築され始めていることを問題視する。売春行為は以前より巧妙な手口で行われているという。

B氏は、自身が地域住民に委託されたまちづくりの担い手であるということから、これまで住民や外部に対して、選定するアーティストやアート作品に関し、「白黒ははっきりせざるをえない」立場であることを自認してきた。それゆえ上でみたようなアート作品の選定など微妙な問題について、公言は避けてきたという。そこからは、地域住民との関係のなかで、B氏が絶えず微妙で困難な課題にさらされつつ、何らかの形で「公式見解」を發し続けなければならない立場にあることが窺える。

III.3. アーティスト兼地域住民として：C氏の語り

C氏は、2010年代からレジデンスアーティストとして黄金町に住みながら作品制作を行い、様々な立体作品を手がけてきた。現在は改めて黄金町に拠点を置き、地域の子どもたちに制作を教えるワークショップ(後述)を共同で開催するなど、活動を続けている。

地域再編の現場につき、C氏にとって特に印象に残っているのは、アートイベント設備が充実していく2011年以後、「街にいるおじいさん方」が次第に焦りだしていったことである。

「街にいるおじいさん方」とは、過去の黄金町に肯定的な地域住民のことである。この人たちは、街を昔のような状態に戻したいという思いから、ホームレスの人に金銭を渡し、アートイベントの拠点に居座るよう指示するなど、「軽い[抵抗]運動」を現在も行っているという。

他方C氏は、アーティストにとっての黄金町を次のように表現する。

「黄金町は」何も考えずに過ごしているとだんだんと勝手に変わってっちゃう街なんだと思うんですよ、面白いことも面白くないこともいきなり変わってっちゃうんですよこの街は。で、自分が変えようとすれば変えられるような街なんです、自分が望めば。…戦後みたいですよ面白いと思っています。

A氏やB氏の関心の先には、あくまでもまちづくりの効果的な実現や、その中でのアートによる創発的なコミュニケーションが関心の的であったが、アーティストであるC氏は、公式のまちづくりにとどまらない実践を志向する。

しかし既述の通り、まちづくりという性質を帯びる以上、自由なアート活動にも制限がある。C氏はあくまでエリアマネジメントセンターが

定める枠組みに沿いつつ、その中で挑戦的な作品を生み出すことが重要であるとする。2010年以後、少しずつ黄金町の「負の歴史」を題材にしたアート作品が作られていったが、当初は懸念もありつつ概ね好評であったという。C氏の実感としても、こうした作品により黄金町を「もっと変えていこうぜ」という雰囲気芽生えたという。

C氏の場合、レジデンスアーティストを卒業した後も、黄金町にて様々な活動を行なっている。インタビューでは、もはやアーティストというレベルにとどまらず、当地の街としてのあり方に積極的に関わろうとする姿が伺えた。

黄金町に今までなかった文化…を作らないといけないので、戦争からずっとここはその呪いみたいのが続いている町なんです、その呪いを文化でぶち壊さないといけない、ぶち壊すというか語りつがえないといけないし、新しい流れを作っていけないといけない…。

「呪い」とは、当地出身者に対して行われていた就学・就職差別やネガティブな意味づけのことである。また上述の風俗業向けマンションの建設が相次いでいる現在の状況下では、黄金町は「もっとハードな街」になってしまう。

これを避けるために、地域住民間でのコミュニケーション不全を解消する必要がある。C氏はこうした問題意識から、エリアマネジメントセンターと共同で、地域の子ども向けの創作の場である「黄金町BASE」を企画運営している。

C氏にとって黄金町BASEでの試みは、面白い街として認識し好きになってもらうための、子ども達に向けた黄金町の歴史を塗り替えていく活動でもある。ここには、地域住民兼アーティストであるC氏の、「負の歴史」をアート作品レベルで想起させつつ、地域の取り組みとしては入れ替えようとする、「歴史」に関するア

ンビバレントな態度がみられる。

IV. おわりに

本調査により明らかとなったのは、黄金町の地域再編の駆動因となる「アート」と、黄金町らしさを規定する「歴史」イメージについて、地域再編に関わった当事者の間でも、異なるものが複層的に提示されているということである。

黄金町の「アートによるまちづくり」は、それ自体一枚岩ではない地域住民、アーティスト、アートディレクターら、さまざまな方向を向いた人びとによる実践の集積である。この実践を

めぐっては、地域住民による一方的な過去の黄金町らしさの排除や、自律的なはずの「アート」を収奪する地域社会という説明では汲み尽くされない、多様だがまとまりのある複数のコミュニケーションの合理性を見出すことができる。

黄金町の「アートによるまちづくり」の実態を理解する上では、こうした多様な行為の合理性がいかにかまとまりを持ち、地域を作り上げているのか、そしてそれがアートと関係を構築するなかでいかに実現しているかを念頭に置き、引き続き調査・考察することが肝要だろう。

付記

本稿は、執筆者と古瀬裕太氏(東京大学教養学部教養学科総合社会科学分科：調査当時)が共同で行った調査に基づき作成された調査報告書を、執筆者が再構成したものである。本調査にご協力いただいた3名のインフォーマントの方々、並びに、黄金町エリアマネジメントセンターの方々に深く御礼申し上げます。

註

1. 黄金町という呼称は通常、京浜急行電鉄の黄金町駅から日ノ出町駅までの高架下沿線一帯を指し、黄金町、初音町、日ノ出町の3町にまたがっている。本稿でもこの慣例を踏襲し、神奈川区横浜市中区黄金町だけでなく、より広がりを持った「アートによるまちづくり」が行われている現場を、黄金町と呼称する。
2. アーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストやクリエイターを一定期間その土地や建物に住ませ、そこに滞在しながら制作活動を行わせる事業である(田中[2012: 12])。

文献

- 壇原照和 (2014)『黄金町クロニクル』スタジオ天神橋(電子書籍).
- 井上和久・友成真一 (2014)「芸術を活用した地域コミュニケーションの創造に関する研究：地域環境資源の活用を黄金町バザールを事例に」『地域活性研究』5: 203-212.
- 越智郁乃 (2016)「都市の社会的包摂／排除に向かうアートマネジメント：横浜市黄金町の事例を通じて」大阪市立大学都市研究プラザ(編)『市大都市研究の最前線：公募型共同研究による連携講座2015』大阪市立大学都市研究プラザ, 84-90.
- 斎藤誠 (2013)「安心・安全・お洒落空間と排除の構造」太湯雅晴『まちづくりのためのプロジェクト／黄金町』自費出版, 8-30.
- 鈴木伸治 (2009)「文化芸術による地区再生と安全・安心のまちづくり：横浜市中区黄金町の事例から」『都市計

画』 58: 62-65.

田中健夫 (2012)「負の歴史をもつ地域に根づくアートによるまちの再生：横浜市中区初黄・日ノ出町地区NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター」『地域創造：町づくりアートを応援します』 31: 10-15.

山野真悟 (2010)「黄金町の再生への取り組み」『地域開発』 544: 42-47.